

★海外文献紹介★

Enhancing the Quality of Life in Schools

Childhood Education

OCTOBER 1977

“Childhood Education” 一九七七年十月号は、「学校での生活の本質を高めるために」をテーマに特集をくんでいる。その中から、オーラリー・マカーフエー女史による同名の論文「学校での生活の本質を高めるために」と、リリアン・G・カツ博士による「幼い子どもたちにとって基本とは何か」を主に紹介している。

*

マカーフエー女史はコロラド州デンバーのメトロポリタン州立大学の準教授である。この論文では実際的な問題をとりあげている。子どもたちがいきいきと学び、成長し、また親も教師も子どもたちと共に喜んで生活できる学校は、ただその学校の玄関に立つだけで感覚的にわかるものだと述べ、それはいったい何なのかと問題を提示して論をすすめていく。

期待の変化

時代と共に学校に対する人々の期待が量・質ともに変化してきた。現在、両親や教師、子どものそれぞれの学校に対する期待は高くなっている。これは食欲のような基本的欲求が満足されてきたために、マスロー（一九六九年）が「高度要求」とよんだもの

——所属自尊、自己実現、最善の成長の要求——に、エネルギーが放たれたからである。しかし、その期待をどうやって遂げるのか、私たちはしばしばわからなくなるのである。

理論的考察

生活の本質を「定義づけること」は不可能なことだろうが、次に掲げる様な観点から理解に近づくことができる。

- 環境的見通しから
- 経済的見通しから
- 社会的見通しから
- 心理学的見通しから
- 教育学的見通しから

価値の測れないものの価値づけ

教育にたずさわる私たちは、学校の生活の本質を高める特性を検証することができないだろうか。これらの「触れることのできないもの」は何なのか。現場の教師や生徒は、この問いに対して、具体的に答えている。

生活の本質の評価

最近、生活の本質を高めるものを「量」で表わそうとしている。明らかに限界はある。だが従来おこなわれてきた学校の評価——建物にかかった費用、授業参観日の親の出席率など——では、本質的な問いである「この実践が子どもやその家族、教師にどんな相違を生ずるか」を見落としてしまう。つまり、「学校の図書館には何冊の本があるか」と問うより、「何冊の本が子どもたちに貸出されているか」と問う方がその本質がわかるのである。学校の生活の本質だけでなく、「家族」や「教師」の生活の本質はどうだろうか。

まとめ

日常、学校でおきていることと「生活の本質」とはかけ離れているように思える。しかし、一分一分、一日一日の活動や感情が、私たちの生活を成していく。私たちは毎日の生活をどうしたのか。必要な変化をどうもたらずのか。何を評価したいのか。最も価値のあるものは何か生活の本質のいくつかの要素は学校の影響下にあるだろう。ここで変えられるものはあるはずである。こんにち私たちは、より本質的な生活を導く論点を定めるために働くことができる。

学校は子どもを教育する場であるが、そこで子どもたちに何を

教育していきたいのかが問題となる。日本では「ゆとりのある生活」を目標として文部省の指導要領が改訂された。教育にたずさわる私たちは、子どもや親、そして教師が本当にいきいきと学校で生活できるようにするにはどうしたらよいのかを常に考えなければならぬ。

○

次に、イリノイ大学の教授、リリアン・G・カッツによる「幼稚園子どもにとって基本とは何か」を紹介しよう。これはカッツ博士が第十四回オーストラリア幼児教育国際会議で発表したものである。

「子どもひとりひとりが、健全な発達のためにしなければならぬことは何か」という問題を提示し、相互に関連のある七つの観点から論じている。

一、幼い子どもは安全であると感じなければならない。——人を愛し、関係をもち、安全を体験することは、単に愛されることから始まるのではなく、ほどよく（最高ではない）愛されていると感じ、求められていると感じ、たいせつだと感じる、ことからである。安全は、単に人々が暖かく反応するのではなく、実際に、反応するの信じさせることで育っていく。

二、ひとりひとりの子どもは適当な（過度ではない）自尊心を

もたなければならぬ。——自尊心はクライテリアに対する自分の評価からできていく。子どもの集団の安寧を守るというクライテリアを子どもたちに獲得させたい。子どもたちがどこにいようと、豊かであろうと貧しくとも、ハンディキャップをおついでようと、正常であっても、成長していく間ずっと、最適な自尊心をもたなければならぬ。

三、ひとりひとりの子どもは、生きる価値があり、適度に満足し、おもしろく、ほんものとして自分の生活を感じ、体験しなければならぬ。——子どもたちは成長していく間中、自分たちの生活が現実であつてたしかなものであり、家にいようと学校にいようと、デイ・ケア・センターにいようと、生きて満足する価値があると感じられるはずである。

四、幼い子どもは、自分たちの体験の理解を助けてくれるおとなや年長の子どもの求めている。——もし私たちが幼い子どもの体験の理解をすすめて、発達するのを助けるなら、それらの理解が何なのかを、あからさまにしなければならぬ。私たちが行動したり、子どもたちが準備された活動をしたりする時に生ずるありのままのことが、私たちに見えなくなるものや、計画に向つて生ずる活動についてよい決定を授けてくれる。

五、幼い子どもには、自分たちのより大きな体験や、知識、知

恵によって、自分たちのものである権威を引き受けるおとながいなければならぬ。——権威主義のおとなは、暖かき、援助、勇氣、適切な説明で、幼い子どもの生活に重要な力を働かせる。

また、子どもを尊敬して扱う。最適の力と最適の暖かさの組み合わせが、子どもたちがどこに、いようと背景がなんであろうと、成長する間、子どもを助ける。

六、幼い子どもは、私たちがかれらに獲得させたい個人的な性質の模範となるおとなや年長の子どもたちとの最適な結合を求めている。——子どもたちの環境を見直し、彼らがどのくらいの範囲にいる人々を模範として関係をもつか、また、どのくらいの範囲で、私たちが育てたい性質の全く反対の人々に気がつくのかと問うている。

七、子どもは、行動する価値とは何か、持つ価値とは何か、知る価値とは何か、そして気にかける価値とは何かを喜んで主張するおとなとの関係や体験を求めている。——私たちは、やる価値のある生活の二者択一の定義を重んじる能力を育てなければならぬ。勇氣や信念をもって主張すれば、私たちが他の人々の価値と同様に自分たちの価値を尊敬する十分な自尊心をもち、思考し、世話をする個人として、若者はたやすく見てくれるだろう。このように思考し、世話をするおとなは、子どもたちがどこにい

ようと、どこからしようと、発達を通して、子どもには重要であるように思える。

カツ博士の論文からはとりたてて新しい事柄を見出せない。日常、どこでも考えられていそうなことである。しかし、幼い子どもにとって、最もたいせつなのはこれらのことなのだ、今一度、改めて考え直すことができる。

また、ジェームズ・L・ハイムス二世は、「大統領と教師について」で、大統領と教師を対比させ、三つの型にわけて論じている。

一つは、人々(子ども)に近づいていく型、二つは、自分を信賴し支持する人々子どもを求める型、三つには、目標を高くかかげ、これを保つ型である。合衆国の歴代の著名な大統領と教室内の大統領である教師とを対比させたところが、興味深く読むことができる。

(角能清美)